

## ジェイムズ・ジョイスと聖キャサリン教会 — 「姉妹」の舞台設定に見るジョイスの思惑—

金 田 法 子

### はじめに

アイルランドの作家ジェイムズ・ジョイス<sup>1</sup>は、将来、妻となる女性ノーラ・バーナクル (Nora Barnacle)<sup>2</sup>に「私の心は現在の一切の社会秩序及びキリスト教を拒絶し、書くこと、語ること、行うことによって[教会組織]に公然と戦争を挑みます」(My mind rejects the whole present social order and Christianity..... I make an open war upon it by what I write and say and do.)<sup>3</sup>と記した書状を送っている。その言葉通り、彼は『ダブリンの市民』(Dubliners)<sup>4</sup>の冒頭の作品「姉妹」において教会批判を開始した<sup>5</sup>。

「姉妹」でジョイスはダブリンの下町ミーズ・ストリートにある聖キャサリン教会 (St. Catherine's Church, Meath Street) を物語の中心に据えた<sup>6</sup>。聖キャサリン教会は、現在もミサ、洗礼、結婚式、葬儀、告解など地域の人々の教会としてミーズ・ストリートに悠然とその姿を残している<sup>7</sup>。ジョイスはダブリンに数多ある教会の中から、なぜ聖キャサリン教会を物語の中心舞台として設定したのか。そこにはジョイスの何らかの思惑が隠されているのではないか。以下、考察を進める。

<sup>1</sup> 世界文学大事典編集委員会『世界文学大事典2』綜合社、1997年、507～515ページ：ジェイムズ・ジョイス (James Augustine Aloysius Joyce, 1882.2.2-1941.1.13) :アイルランドの作家。主な作品、『ダブリンの市民』(Dubliners)、『若い芸術家の肖像』(A Portrait of the Artist as a Young Man)、『ユリシーズ』(Ulysses)、『フィネガンズ・ウエイク』(Finnegans Wake)。

<sup>2</sup> Fargnoli, A.N. and Gillespie, M.P., *James Joyce A To Z*, Facts On File, Inc. 1995, p. 13. Nora Barnacle (1884-1951).

<sup>3</sup> Joyce, James, *Selected Letters of James Joyce*, ed., Ellmann, Richard, Faber and Faber, 1992, pp. 25-26:1904年8月29日付け書状。

<sup>4</sup> Staley, Thomas F., *An Annotated Critical Bibliography of James Joyce*, Harester Wheatsheaf, 1989, p. 12.『ダブリンの市民』(Dubliners) は、1914年6月15日、ジョイスが32歳の時に発行されている。

<sup>5</sup> Jackson, John W. & McGinley, Bernard, *James Joyce's Dubliners - An Annotated Edition*, Sinclair-Stevenson, 1993, p. 156.

<sup>6</sup> 金田法子「『ダブリンの市民』の中の作品「姉妹」に見るジェイムズ・ジョイスの教会批判」『社会文化科学研究科紀要』第32号、岡山大学大学院、2011年11月、267-284ページ。

<sup>7</sup> St. Catherine's Parish 教会案内、2ページ。聖キャサリン教会の正式名はSt. Catherine of Alexandriaである。

## 第一章「姉妹」

### 第一節 あらすじ

フリン神父が三度目の発作を起す。主人公の少年は神父の様態が気になり、彼の住まいの前を歩き来する。彼は神父の部屋を見上げる際に、「麻痺」という言葉をつぶやく。その言葉は、「ノーモン」や「聖職売買」のように奇妙に響く<sup>8</sup>。ある日、叔父の友人のコッターさんがやって来て「神父が亡くなった」と告げ「神父にはどこか不気味なところがあった。……ああいう人と自分の子供とはあまりつき合わせたくない<sup>9</sup>と語る。少年はグレート・ブリテン・ストリートの神父の住まいである慎ましい店に行き彼の逝去を告げるカードを目にする。

フリン神父は港に隣接する貧民の街として知られるアイリッシュタウンに生まれ育った。学問に秀でていた彼は司祭への道を進むため神学校に入学し、やがて、極少数の学生が入学を許されるローマにあるアイルランド神学校に留学するようになる。そこで彼は将来教会組織での中心的役割を担う者としての教育を受ける。しかし、帰国後、彼はなぜかそうした地位には就かず、下町の雑踏の中にある聖キャサリン教会に配属される。

そのような状況にあっても神父は日々の勤めを几帳面に、忠実にこなし主人公の少年にラテン語や大罪・小罪、そして、告解室の秘密保持などについて教える。他方、少年は告解室で漏らされる秘密に対する司祭の職任はあまりにも重大ではないか、どうして司祭はそのような責務を引き受ける勇氣を持てるのだろうかと思議に思う。

少年は叔母と一緒に神父の家を訪ねる。神父の姉エライザは「司祭の務めは彼には荷が重すぎたようでした。ある日、侍者の過ちで聖杯が壊れてしまい……中には何も入っていなかったのに彼はとても気に病んで……」<sup>10</sup>と語る。

ある夜、神父は人を訪問することになっていたのに姿が見えなくなった。皆が探すと彼は一人、聖キャサリン教会の薄暗い告解室に座り大きく目を見開いて一人薄ら笑いをしているところを発見される。皆はそれを見てこれはどこかおかしいと思う。

<sup>8</sup> 金田法子『『ダブリンの市民』の中の作品「姉妹」に見るジェイムズ・ジョイスの教会批判』『社会文化科学研究科紀要』第32号、岡山大学大学院、2011年11月、267-284ページ：「麻痺」、「ノーモン」は、いずれも機能不全またはあるべきものが欠けている状態を示す。聖職売買は「この世のものは全て霊的事物であり売買するには相応しくない」とする聖トマス・アクィナスの概念。

<sup>9</sup> ジェイムズ・ジョイス『ダブリンの市民』結城英雄訳、岩波文庫、2008年、12-13ページ。

<sup>10</sup> 同書、25ページ。

## 第二節 問題の所在

ジョイスが「姉妹」の中で登場させた舞台のすべてが現存する。フリン神父の生まれ故郷であるアイリッシュタウン (Irishtown)、神父が留学をしたローマのアイランド神学校 (The Irish College in Rome)、司祭を務めたミーズ・ストリート (Meath Street) の聖キャサリン教会 (St.Catherine's Church)、現在ではその名をパーネル・ストリート (Parnell Street)<sup>11</sup>と改めているが、彼が二人の姉妹と暮らしたグレート・ブリテン・ストリート (Great Britain Street) などである。

そうした舞台の中でも筆者は特に聖キャサリン教会に関心を持った。それは一つには、フリン神父がローマに留学をし、将来教会組織の要としての役割を担えるような教育を受けてきたにも係わらず、帰国後そうした地位に就くことはなく、ビールやウイスキー工場、また、家畜市場や野菜市場でざわめく下町の一角にある聖キャサリン教会に配属されたことを疑問に感じたことがある。

二つ目には、姉エライザの「聖杯の中には何も入っていませんでした。ですが、聖杯のことで彼が気に病み精神に影響を来すようになっていったのです」<sup>12</sup>との語りや、最後に神父が聖キャサリン教会の薄暗い告解室で自らに向けて薄笑いをしていたとの語り (laughing-like softly to himself)<sup>13</sup>を奇異に感じたことにある。なぜなら、神父は聖トマス・アクィナスの説くキリスト教の教義や典礼をローマの神学校において学び、それを熟知していた。その神父が「何も入っていませんでした聖杯」、すなわち、キリストの血が入っておらず「単なる容器」<sup>14</sup>として見做すことの出来る「聖杯」を壊したことを原因として精神に病を来していったとの記述を不合理であり、不自然と考えたからである。

さらに、ジョイスはフリン神父の「薄笑い」の場所を自宅の一室ではなく「告解室」の中とした。なぜ、それが「告解室」の中でならなければならなかったのか。また、なぜ、その「告解室」は聖キャサリン教会の「告解室」でなければならなかったのか。筆者はそこにジョイスの何かの思惑が隠されているのではないかと考えた。

三つ目は、フリン神父について「物語では神父の全貌を示した話一つもなく、この人物についての印象が互に一致するような話もない。したがって、読者が作中での話を一致させ神父の生涯を読者なりに思い浮かべるしかない」<sup>15</sup>という記述が見られたことである。それならば、フリン神父とその配属先である聖キャサリン教会を関連づける方法で神父の生涯を思い描くことはできないかと考えた。

<sup>11</sup> グレート・ブリテン・ストリートは、現在、かつてアイランドの政治指導者であったチャールズ・スチュアート・パーネル (Charles Stewart Parnell) の名を取ってパーネル・ストリート (Parnell Street) と名を変えている。

<sup>12</sup> ジェイムズ・ジョイス『ダブリンの市民』結城英雄訳、岩波文庫、2008年、25ページ。

<sup>13</sup> Joyce, James, *Dubliners*, Wordsworth Classics, 1993, p. 7.

<sup>14</sup> 金田法子『『ダブリンの市民』の中の作品「姉妹」に見るジェイムズ・ジョイスの教会批判』『社会文化科学研究科紀要』第32号、岡山大学大学院、2011年11月、267-284ページ：聖トマス・アクィナスによると聖杯の中には何も入ってなければその聖杯は単なる器と見做される。

<sup>15</sup> A.N. ファーグノリ & M.P. ギレスピー『ジェイムズ・ジョイス事典』ジェイムズ・ジョイス研究会訳、1997年、198ページ。

なお、先行研究について聖キャサリン教会と神父の生涯とを関連付けた研究を探したものの管見の限り見当たらず<sup>16</sup>、今回の研究の意義を少なからず確信する。

### 第三節 調査方法

考察を開始するに当たり、2011年9月にアイルランド、ダブリン市を訪れ現地調査を行った。初めに、ミーズ・ストリートの聖キャサリン教会を訪れ、教会の歴史を尋ねた。その上で、当時の聖キャサリン教会はどのような産業構造を持った街に存在していたのか、その街に住む人々はどのような人々であったのか、聖キャサリン教会はどのような構造的特徴を備えていたのか、ジョイスはいつどのようにして聖キャサリン教会を物語の主要舞台に据えることを決意したのかなどについて考察した。

なお、本稿では物語を語る少年をジョイス自身とし、フリン神父が実在していたと仮定し考察を進める。それはジョイス自身が「『姉妹』は私の子供の頃の物語だ」<sup>17</sup>と弟に宛てた手紙で語っていること、また、「姉妹」の中で少年が「告白」や司祭の職任に対する強い疑問を呈していることなどがジョイスの教会批判と一致するためである。また、フリン神父についてジョイス研究者であるリチャード・エルマンは「ジョイスは、母方の親戚で精神を病み教区付司祭の職を解任された司祭をフリン神父<sup>18</sup>として登場させた」と記している。それを以下のジョイス家の系譜<sup>19</sup>で確認したところ、そこからは確かにジョイスの祖母にあたる女性がマーガレット・テレーザ・フリン (Margaret Theresa Flynn, 1881年死亡) であったことが分かり、フリン神父が実在した可能性が高いことが明らかになったためである。

---

<sup>16</sup> Stanley, Thomas F., *An Annotated Critical Bibliography of James Joyce*, Harvester Wheatsheaf, 1989.  
Slocum, John J. *A Bibliography of James Joyce*, Greenwood Press, 1977.

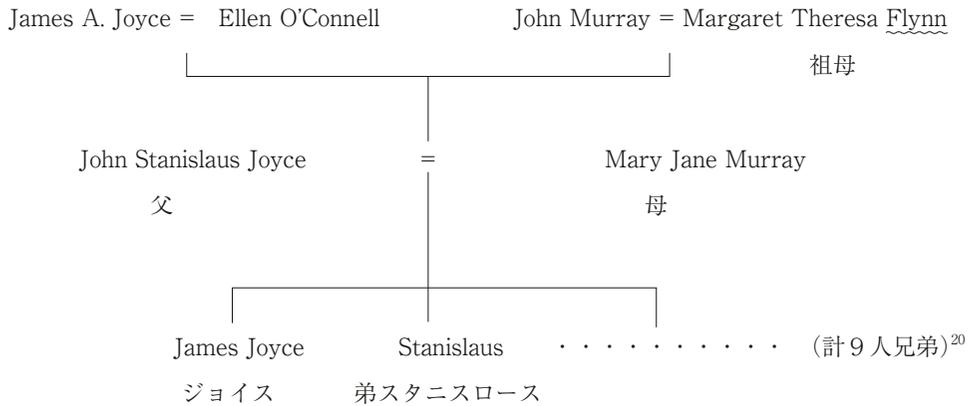
Rice, Thomas Jackson, *James Joyce - A Guide to Research*, Garland Publishing, Inc., 1982.

<sup>17</sup> Joyce, James, *Selected Letters of James Joyce*, ed., Ellmann, Richard, Faber and Faber, 1992, p. 77 : 1905年9月24日付け書状。

<sup>18</sup> Ellmann, Richard, *James Joyce*, Oxford University Press, 1983, p. 20: On the Flynn side of the family as the priest described in *The Sisters*, who became harmlessly insane and lost his parish.

<sup>19</sup> Jackson, John W. and Costello, Peter, *John Stanislaus Joyce - The Voluminous Life and Genius of James Joyce's Father*, St. Martin's Press, 1997: 表紙内側ページ。

## ジョイス家系譜



考察を進める際、「姉妹」の作品理解と歴史的側面との整合性を期すため、フリン神父の当時の推定年齢を交え論じる。作中ではフリン神父が死亡したのは、1895年7月1日、享年65歳となっている。逆算すると神父は1830年に誕生したことになる。その後、神父はローマにあるアイルランド神学校に留学をするが、当時、この神学校に留学をしてきた学生の多くは20代前半であり、平均留学年数は6年であった<sup>21</sup>。したがって、フリン神父は1850年、20歳の時にローマに留学し6年間滞在して勉学に励み、1856年、26歳の時にアイルランドに帰国した。その後、聖キャサリン教会に配属され39年に渡って司祭を務めた。やがて、周囲から奇人・変人という噂が立ち始め、神父は徐々に精神に病を来とし、1895年に65歳で死去したと仮定した。

## 第二章 アイルランド・カトリック史と聖キャサリン教会を取り巻く風景

### 第一節 アイルランド・カトリック史

聖キャサリン教会が位置するミーズ・ストリート付近には、アイルランドの先住民であるケルト人の時代にも聖堂らしきものが存在した<sup>22</sup>。その後、年月を経て、1177年にそこに聖トマス修道院付属の礼拝堂が建設され、それが後の「聖キャサリン教会」として発展していった。

イングランドではヘンリー八世<sup>23</sup>が1534年の国王至上法に基づいて国教会による宗教改革を開始し

<sup>20</sup> Jackson, J.W. and Costello, P., *John Stanislaus Joyce*, St. Martin's Press, 1997: 表紙内側ページ。

<sup>21</sup> Pontificio Collegio Irlandese, Roma, Italy. (2012年3月4日)

<sup>22</sup> *St. Catherine's Parish* 教会案内, p. 7.

<sup>23</sup> 京都大学文学部西洋史研究室編『西洋史辞典』東京創元社、1976年、628ページ：ヘンリー八世：1491年 - 1547年。

た。イングランドとアイルランドにある修道院のすべての解体が命じられ、1539年には聖キャサリン教会の財産もイングランドに没収された。さらに、1604年にはイングランド王及びアイルランド王となったジェームズ I 世<sup>24</sup>がカトリックと清教徒の排除を宣言し司祭狩りを行った。聖キャサリン教会の最初の司祭であったドナ神父 (Fr. Donnagh) も1617年に捕らえられた。それ以降も、アイルランドでは聖職者のみならず一般人の財産も没収されていった。しかし、人々の信仰は揺らぐことなく、ミサは継続していった。

1649年になるとオリバー・クロムウェルがカトリックの反徒と王党派の軍隊が占領しているアイルランドへ軍隊を侵攻させた<sup>25</sup>。アイルランド各地で大量の虐殺や土地の没収が行われ、カトリックの領主は西部の貧しい土地へ追いやられた。次第にアイルランドの土地の大部分がプロテスタントの所有となり、イギリスのアイルランド支配が確立されカトリック信仰への迫害が激化していった。イングランドはイングランド系住民のアイルランドでの優位性を保つためカトリック刑法を制定し、アイルランドの人々とその支配者であるイングランド人との明確な差別化を図っていった。

18世紀中葉にアメリカで独立戦争が起こるとイングランドは北米対策に翻弄されアイルランド対策に隙が生まれた。この間にアイルランドでは議会の地位を著しく向上させていった。1789年にフランス革命が勃発するとさらに立場の向上を目指す政治運動が活発化した。危機感を抱いたイングランドはカトリック解放と交換取引で1800年に連合法を成立させた。アイルランド議会はウェストミンスター議会に併合され「グレートブリテン国およびアイルランド連合王国」が成立した。

1829年にはカトリック解放法が発布されアイルランド全土にカトリック教会の建設計画が壮大な規模で実施された。1852年には現在の聖キャサリン教会の礎石が敷かれ、1858年にはミサが開始されるようになった。1860年代には二棟の司祭館が700ポンドの費用をかけて建設された。それ以降、75年をかけて聖キャサリン教会には壮麗なステンド・グラスの窓が飾られ、玄関も新たなものに建て替えられた。

以上から、聖キャサリン教会は当時極貧に喘ぐ人々の住む下町の喧噪の中で、カトリック教会の権威を象徴するかのようになびき立っていた。

<sup>24</sup> 同書、279ページ。ジェームズ 6 世 (James VI) またはジェームズ 1 世 (James I)、チャールズ・ジェームズ・ステュアート (Charles James Stuart, 1566年 6月19日 - 1625年 3月27日) は、スコットランド、イングランド、アイルランドの王。スコットランドではジェームズ 6 世 (在位: 1567年 7月29日 - 1625年 3月27日)、イングランド王・アイルランド王としてはジェームズ 1 世 (在位: 1603年 7月25日 - 1625年 3月27日)。

<sup>25</sup> J.C.ベケット『アイルランド史』藤森一明他訳、八潮出版社、1978年、107ページ。

## 第二節 聖キャサリン教会を取り巻く風景

フリン神父が所属していたミーズ・ストリート (Meath Street) に在る聖キャサリン教会 (St. Catherine's Church) はカトリック教徒のための教会であり、正式名をアレキサンドリアの聖キャサリン (St. Catherine of Alexandria) という。そこから徒歩で15分程離れたトマス・ストリート (Thomas Street) には同じく聖キャサリン教会と名付けられた教会がある。こちらはプロテスタントの教会であり、正式名を St. Catherine's Church という。

調査にあたり、カトリック教会である聖キャサリン教会についての情報を探したものの入手が困難であった。しかし、プロテスタント教区については『聖キャサリン教会教区1840-1900年』<sup>26</sup>と題された聖職者向けの教本が存在した。この教本にはフリン神父の10歳当時から、死亡した1895年以降の5年間の情報が掲載されている。したがって、プロテスタント教区の情報ではあるが神父の生きた時代の街の様子を知る上では貴重であり、本節ではこの教本を参考にした。

どちらの聖キャサリン教会も「リバディーズ」(Liberties)<sup>27</sup>と呼ばれる地域にある。そこでは住民に通行税、輸送税、歩道税、埠頭税などが免除される特権が与えられていた。現代版の「経済特区」のようなものであろう。1759年にはギネス・ビールの工場が完成し、10年後にはビールのイングランドへの輸出が開始され1900年になると5,000人の従業員が勤務するようになった。その一方で、1770年代には地域の絹・織物産業<sup>28</sup>が輸入品との競争により大きな打撃を受け、失業者が増大し地域のスラム化に拍車をかけた。1780年にはジェムソン蒸留酒製造所<sup>29</sup>がウイスキーの生産を開始し、1805年には世界有数のウイスキー・メーカーへと成長した。「姉妹」に登場しフリン神父の死去を伝えたコッター爺さんも不純アルコールや蒸留器の螺旋管について話をしていることから<sup>30</sup>、おそらく彼もこの蒸留酒製造所に勤務していたと推察される。1800年から1900年の間には8,000人の労働者がジェイコブスのビスケット工場やギネスのビール工場で働くようになっていた<sup>31</sup>。またこの界限には家畜市場や野菜市場などもあった。

こうした様子からジョイスが「姉妹」の舞台とした聖キャサリン教会の周辺は、経済的な繁栄を享受し活気に満ち溢れた街とのイメージが想起される。しかし、この時代、1845年から1852年にかけてアイルランドでは「じゃがいも飢饉」が勃発し多くの人々が飢えと窮乏に瀕していた。統計によると<sup>32</sup>、この飢饉で100万余りの人々が死亡したとされ、「じゃがいも飢饉」が起こる前の1841年、フリ

<sup>26</sup> Crawford, John, *St. Catherine's Parish Dublin 1840-1900 - Portrait of a Church of Ireland Community*, Irish Academic Press, 1996.

<sup>27</sup> *Ibid.*, p. 13.

<sup>28</sup> *Ibid.*, p. 16.

<sup>29</sup> *Ibid.*, p. 16. Jameson's Distillery in Marrowbone Lane, Dublin.

<sup>30</sup> ジェイムズ・ジョイス『ダブリンの市民』結城英雄訳、岩波文庫、2008年、12ページ。

<sup>31</sup> Nisi, V., Davenport, G., and Haahr, M., *Mediated Portrait of the Dublin Liberties*, Trinity College, Dublin,

<sup>32</sup> アイルランド自由国統計 (現在の Central Statistics Office 中央統計局) (2012年3月5日)

ン神父が11歳になった頃653万人であったアイルランドの人口は、1851年には511万人<sup>33</sup>に減少した<sup>34</sup>。さらに、1840年から1900年の間には高い疾病率と死亡率が記録され、ブリテン及びアイルランドの主要都市の内ダブリンは「最も不健康な都市」<sup>35</sup>として知られるようになった。街には狭い路地が錯綜し、あばら家が林立し、多くの人々が日々の糧を得ようと奔走した。ジョイスはそうした街の姿と悠然とそびえ立つ聖キャサリン教会とを重ね合わせ、主人公の少年が語るようにその奇妙さ、不合理さに強い反感を覚えダブリンの「麻痺」を描くことを意図したと考える。

調査で特に目に付いたのはこの界隈に存在する肉屋の多さである。それを現地の人に尋ねたところ、昔、この通りはブッチャー・ストリート（肉屋通り）と呼ばれていたとのことであった。ジョイスは『ユリシーズ』の中で家畜市場で屠殺される動物に関し「動物にも痛みはあろう……あわれな震える子牛たちよ」(Pain to animal too... poor trembling calves)と書き、また、「切り刻んだ部位を乱暴に扱うなよ」<sup>36</sup>(Don't maul them pieces)とブッチャー（肉屋）に警鐘を鳴らしている。さらに彼は肉屋を「死刑執行人」<sup>37</sup>(dio boia, hangaman god)と見做す表現を用いていることからブッチャー・ストリートに位置する聖キャサリン教会を物語の中心に据えることで、貧困に喘ぐ一般市民の魂が教会に圧殺されていることを示唆し、それを「あわれ」と関連付け自身の教会批判の一端とすることを意図したと考える<sup>38</sup>。

<sup>33</sup> 海外への移民を含む。

<sup>34</sup> 国際通貨基金統計 (IMF Outlook - World Economic Outlook 2011年9月版): この減少傾向は1980年頃まで続き、その後、徐々に回復を見せ、2011年の人口(予測値)は458万人となっている。また神父が21歳の時から30歳になった9年間の海外への人口流出は120万人となっている。

<sup>35</sup> Crawford, John, *St. Catherine's Parish Dublin 1840-1900 - Portrait of a Church of Ireland Community*, Irish Academic Press, 1996, p. 13: "Dublin was regarded as the unhealthiest major city in Britain or Ireland."

<sup>36</sup> Joyce, James, *Ulysses*, Vintage Books, 1986, p. 140: (Flayed glass-eyed sheep hung from their haunches, sheepsnouts bloodypapered sniveling nose jam on sawdust. Top and lashers going out. Don't maul them pieces, young one.)

<sup>37</sup> *Ibid.*, p. 175: (The playwright who wrote the folio of this world and wrote it badly, the lord of things as they are whom the most Roman of Catholics call dio boia, hangman god, is doubtless all in all in all of us, ostler and butcher...)

<sup>38</sup> ジェイムズ・ジョイス『ジェイムズ・ジョイス伝1』宮田恭子訳、みすず書房、1996年、166ページ: エルマンは、ジョイスがメタファー（隠喩）を用いて他の言葉を連想し導き出すことについて『ユリシーズ』の主人公のブルームが肉屋でまったく別のことを考えている時でも無意識に肉からメタファーを借りているように、言語に場面の様相を反映させさせた」と記している。

### 第三章 聖キャサリン教会の選定（舞台設定の変更）、選定時期、構造的特徴

#### 第一節 舞台設定の変更

「姉妹」には初版と改訂版の二作がある。初版は22歳の時に執筆され、1904年8月13日付け *The Irish Homestead* 「アイルランド農園」<sup>39</sup>に掲載された。改訂版は1914年に短編集『ダブリンの市民』が出版される前に大幅に書き替えられ、『ダブリンの市民』の冒頭におかれた<sup>40</sup>。

双方の顕著な差として、次の二点が挙げられる。一点目は、改訂版に『ダブリンの市民』全体に浸透するテーマとして、「麻痺」、「ノーモン」、「聖職売買」の三つのキーワードが盛り込まれたことである。二点目は、作品の主要舞台である「教会」が初版では所在地が明かされていない「聖イタ教会」(St. Ita's Church)であったが、改訂版では「ミーズ・ストリートの聖キャサリン教会」(St. Catherine's Church, Meath Street)と所在地が明記され、教会も「聖キャサリン教会」へと変更されたことである。

この他の差としては、改訂版では神父の奇妙さが強調されているものの初版ではそうした神父の否定的な側面についての描写は影を潜めている。却って、神父が非常な読書家であったこと、耳が殆ど聞こえない妹のナニーが彼に新聞を読み聞かせるが、飽きると神父は彼女に大声を出して知らせる代わりに嗅ぎたばこの箱をガチャガチャ鳴らせてそれを気づかせたこと、そして、祈祷書を読むふりをしていたことなど、彼の優しくユーモアに溢れた人間像を写し出すような描写がなされていることがある。またコッター爺さんが蒸留酒製造所に勤務していたこと、叔母さんが、害はないがゴシップが好き、などといった登場人物についてのより詳しい描写がなされていることも挙げられる。さらに、初版では、お棺の中で神父はロザリオを手にしていたが、改訂版では聖杯を持っていたことがある。次節では、初版と改訂版の主要な差である、中心舞台の聖イタ教会から聖キャサリン教会への変更について考察を行う。

#### 第二節 「聖イタ教会」から「聖キャサリン教会」へ

聖イタ (St. Ita)<sup>41</sup>は570年頃、アイルランドの南西部リメリック州に実在し女子修道院長を務めたとされる人物である。彼女のモットーは「清い心で神を信じること、信仰を持ち質素に生きること」であった<sup>42</sup>。

ダブリン市内には聖イタ教会という名の教会はないが、ダブリンの隣のキルデア州 (Co. Kildare)

<sup>39</sup> Jackson John W. & Bernard McGinley, *James Joyce's Dubliners - An Annotated Edition*, Sinclair-Stevenson, 1993. p. 10.

<sup>40</sup> Fagnoli, A.N. and Gillespie, M.P., *James Joyce A To Z*, Facts On File, Inc. 1995, p. 205.

<sup>41</sup> 日本キリスト教出版局『キリスト教人名辞典』1968年、132ページ：Ita: ?-570頃。アイルランドの女子修道院長。聖人。

<sup>42</sup> 詳細な情報を得るべく史料を検索したが、これ以上の聖イタについての情報は入手困難であった。

のアタイ (Athy) という小さな街に「聖イタ教会」が存在する<sup>43</sup>。キルデア州はジョイスが6歳半から9歳まで寄宿舎生活を過ごしたクロンゴーズ・ウッド・カレッジのある州である。クロンゴーズからアタイの街までは約40kmの距離がある。

「アタイ」の名は『若い芸術家の肖像』にジョイスの上級の生徒として登場するアタイ少年の名でもある。彼は「僕の名前は街の名前と同じアタイっていうんだ……君、なぜなぞは得意？」<sup>44</sup>と話しかけてくる。この「なぜなぞ」をきっかけにジョイス少年はアタイ少年と親しく会話をするようになり「アタイ (Athy) に一つしかない教会の名前は？」と聞かれ、アナグラム (文字の並べ替え遊び) を得意とするジョイス少年が「イタ (Ita) !」と答え、それが彼の記憶に残り、後に「姉妹」の作中で引用されたのかも知れない。

しかし、なぜジョイスは初版の「姉妹」の舞台として聖イタの名を使用したのだろうか。上述したように聖イタのモットーは「清い心で神を信じること。信仰を持ち質素に生きること」である。ジョイスは信仰について「必要なのは完全に信じること……盲目的信仰だ」<sup>45</sup> (Blind faith)<sup>46</sup>と『ユリシーズ』の主人公ブルームに語らせているが、このブルームの信条と聖イタの「清い心で神を信じる」というモットーが合致する。さらに、ジョイスは『若い芸術家の肖像』に登場する家庭教師のダンテに次のように語らせている。

神様と信仰が何よりも先です！ 世界のことより神様と信仰が何よりも先です！

God and religion before everything! God and religion before the world !<sup>47</sup>

フリン神父が31歳であった1861年当時、アイルランドは人口の89.4%<sup>48</sup>をカトリック教徒が占めていた。教会の支配の下、人々が貧困に苦しむ中で「盲目的信仰」は当時ダブリンに生きる人々に普遍的なものであった<sup>49</sup>。したがって、「盲目的信仰」を告発するというジョイスの思惑と「盲目的信仰」のシンボルでもある聖イタの存在がジョイスの思惑と一致する。このため、彼は初版で聖イタ教会の名前を採用したと考える。

しかし、改訂版では「聖イタ教会」の名は消え、代わって「聖キャサリン教会」が登場する。なぜか。

<sup>43</sup> ダブリン大司教管区事務局 (Archdiocese of Dublin)、(2012年6月20日)

<sup>44</sup> Joyce, James, *A Portrait of the Artist as a Young Man*, Wordsworth Classics, 1992, p. 17.

<sup>45</sup> ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』丸谷オ一訳、集英社、1996年、203ページ。

<sup>46</sup> Joyce, James, *Ulysses*, Vintage Books, 1986, p. 66.

<sup>47</sup> Joyce, James, *A Portrait of the Artist as a Young Man*, Wordsworth Classics, 1992, p. 28.

<sup>48</sup> 統計出典: Saorstat Eireann (Irish Free State)。現 Central Statistics Office, Ireland (アイルランド中央統計局)。

<sup>49</sup> 筆者の約13年間のダブリン滞在においても教会のミサへの参列は人々の一大関心事であることを強く感じ、宗教についてはあたかも相互規制社会の星を成しているのではないかとの印象を受けたほどである。

聖キャサリン教会の正式名はSt. Catherine of Alexandria (アレキサンドリアの聖キャサリン) である。キリスト教殉教伝承によるとキャサリンはエジプトの王女であり博学で知られていた<sup>50</sup>。18歳の頃、皇帝の前でキリスト教を批判する異教徒学者50人を相手に議論を戦わせ全員をキリスト教に改宗させた。皇帝は彼女に結婚を迫るが自分はキリストの花嫁であると申込みを拒否する。怒りをつのらせた皇帝はキャサリンがキリスト教に改宗させた学者たちを火刑にしてしまう。それに抗議したキャサリンは捕えられ車輪に縛り付けられ身を引き裂かれそうになる。そこに奇跡が起こり車輪は壊れ、逆に拷問者が負傷する。その後、彼女は斬首されるが、天使が現れ彼女の遺体をシナイ山に運び埋葬する。800年頃にキャサリンの亡き骸が発見され、シナイ山にある修道院にキリスト教の十四救難聖人の一人として祭られる<sup>51</sup>。

このようにエジプトの王女であり殉教者でもある「聖キャサリン」とアイルランドの片田舎に住み「清い心で神を信じること。信仰を持ち質素に生きること」をモットーとした「聖イタ」との差は別次元である。ジョイスは「多くの人間がこれが都市だと考えるあの半身不随、魂の麻痺した[街]の姿を描くため『ダブリンの市民』を書いている」<sup>52</sup>と友人に語った。その壮大なミッションを遂げるにはエジプトの王女であり十四救難聖人の一人として今もシナイ山に祭られる聖キャサリンの名を冠した「聖キャサリン教会」こそジョイスの目的に叶うものであった。

### 第三節 選定期期

ジョイスが初版の「聖イタ教会」から改訂版の「ミーズ・ストリートの聖キャサリン教会」に改める最終決断を下したのはいつ頃のことなのだろうか。

1904年10月8日に「自発的亡命」<sup>53</sup>と称しアイルランドを出国して以来、祖国へ帰国したのは「自発的亡命」から5年が経過した1909年7月29日より9月9日までが初めてである。この帰国には、1905年に誕生した息子ジョルジオ (Giorgio) を同伴している<sup>54</sup>。二回目は単身で、1909年10月21日より1910年1月2日までである<sup>55</sup>。三回目で最後となった帰国は、息子と一足先に祖国を訪れていたノーラと娘ルチア (Lucia) と合流し、1912年7月8日より9月11日までの滞在であった<sup>56</sup>。いずれの滞在期間も2ヶ月半ほどであるが、注目したいのは二回目、1909年の帰国である。それは一回目の帰国には息子が同伴しており出版社との交渉を行ったが進展せずジョイスの不満が鬱積していた時期であった。また三回目の訪問は当初は出版社との交渉が目的であったが、決裂し憤慨したジョイスは以降二

<sup>50</sup> 日本キリスト教出版局『キリスト教人名辞典』1968年、363ページ：Catherine (英)、Catharina (ラ) -309頃。

<sup>51</sup> 聖キャサリン修道院 <http://ja.wikipedia.org/wiki/> (2012年3月1日)

<sup>52</sup> Joyce, James, *Selected Letters of James Joyce*, ed., Ellmann, Richard, Faber and Faber, 1992, p. 22.

<sup>53</sup> Joyce, James, *Selected Letters of James Joyce*, ed., Ellmann, Richard, Faber and Faber, 1992, p. 56.

<sup>54</sup> Ellmann, Richard, *James Joyce*, Oxford University Press, 1983, pp. 276-291.

<sup>55</sup> *Ibid.*, pp. 301-308.

<sup>56</sup> *Ibid.*, pp. 323-335.

度と祖国に戻る事はなかったという波乱含みの帰国となっている。それと比較すると二回目の帰国はジョイスがアイルランドに未だ存在していない常設の映画館を設置することをトリエステに住む企業家に持ちかけ実現したものであり、新たな企画を実現に移すという彼にとっては野心と夢が交錯した旅でもあった。またこの帰国では、「映画館に相応しい建物を探し求めダブリンを歩き回った」<sup>57</sup>との記録もある。したがって、ジョイスが最終的に聖キャサリン教会を舞台として選定したのは、1909年10月21日より1910年1月2日の二回目の帰国の際のことであったと推察する。

#### 第四節 聖キャサリン教会の構造的特徴

ダブリンにはカトリック教会が多く存在する。だが、ジョイスの選択は下町の雑踏に在る聖キャサリン教会であった。この教会のどのような構造的特徴がジョイスの思惑と一致したのだろうか。

聖キャサリン教会には重々しい雰囲気漂う。教会の正面に立つと玄関左側の大きな掲示板が目につく。そこにはミサの時間と並んで「告解」(Confessions)の文字と日程が記されている。

教会の扉を開けると真正面の豪華なステンド・グラスが目に入る。特に目立つのは左右に設置された濃い茶色のペンキで塗られた重厚感のある大きな告解室の姿である。これが左右に二つずつ、合計四室設置されている。

祭壇に向かって左側には「聖具室」として使われていた部屋がある。その右隣りには告解室が置かれている。一つの告解室のユニットには、左に一部屋、右に一部屋の告解室があり中央に司祭が入る小部屋がある。その右隣りを見ると聖ジョセフ (St. Joseph) の像が祭られている。さらに祭壇に近づいた場所にもう一つの告解室のユニットがある。

正面の祭壇に向かって右側の構造は左側に合わせたシンメトリーの構造になっている。一つ異なるのは左側の聖ジョセフの像が右側では聖テレサ (St. Teresa) の像になっていることである。

今回のヒアリングで明らかになった事であるが、現在、聖ジョセフや聖テレサの像が祭られている場所に昔は告解室があつたユニットずつ設置されていた。するとジョイスの時代には大きな告解室のユニットが左に3つ、右に3つ、合計6ユニットが存在していたことになる。しかし、1960年代の第二バチカン公会議<sup>58</sup>以降、告解室の数があまりにも多いとされ、その数を左右一ユニットずつ減らしたという。そして、告解室のあつた場所に現在設置されている聖ジョセフと聖テレサの像を置き、四ユニットとした。それだけでも随分威圧感を感じさせるのだが、ジョイスの時代には大きな告解室が左右合計6ユニットも存在したことになり、教会批判を意図していたジョイスも聖キャサリン教会の「告解」重視の姿勢に衝撃を受けたのではないだろうか。

<sup>57</sup> *Ibid.*, p. 301.

<sup>58</sup> 南山大学監修『第2バチカン公会議公文書全集』サンパウロ、2011年；第二バチカン公会議：1962年-1965年。

#### 第四章 「教会」とフリン神父

フリン神父はその優秀性から多くの司祭たちが恐れ、僅かなエリートのみが入学を許されたローマのアイランド神学校<sup>59</sup>への留学を果たした。1850年、フリン神父が20歳の頃の神学校の統計<sup>60</sup>によると当時の学生数は22人であった。この学校の修了者の中には1691年に聖人化されたオリバー・プラケットの他、メイヨー州クローハ地区マクマホン司教、アーマー州マクマホン大司教、キルデア州ガラハー司教など、アイランドのカトリック教会組織において指導的な立場に就く人たちの姿が多く見られた。

こうした経緯から、フリン神父も帰国後は、当然、社会的にも経済的にも恵まれ、教会組織で自らの影響を行使し得るような職責を期待していたであろう。しかし、神父の夢は水泡に帰し、ミーズ・ストリートにある聖キャサリン教会の司祭の地位に甘んじるようになる。通常、司祭の地位にある聖職者は教会の敷地内にある施設を宿舎として提供され、そこを住まいとする。しかし、なぜか神父には司祭館の一室は与えられず、グレート・ブリテン・ストリートの「布地類」という看板を掲げたうらぶれた店の二階の一室を住まいとする。他方、今回の調査で当時の聖キャサリン教会には立派な司祭館が二棟存在したことが明らかになった<sup>61</sup>。現在の聖キャサリン教会には主任司祭を筆頭に六名の聖職者が配属されている<sup>62</sup>。もしフリン神父の時代の司祭数がこれと同等あるいはそれ以上であったとしても、司祭館が二棟もあればフリン神父の部屋は容易に確保できたはずである。ましてや彼は将来を囑望されローマの神学校にまで派遣された人物である。

神父は1895年に65歳で死亡するが、その際の教会の神父に対する処遇についても不可解な点が見られる。まず、納棺の準備と礼拝堂でのミサの手配である。通常、司祭の死去にあたっては教会がその手筈を整える。しかし、フリン神父の場合、姉のエライザが自分と妹がミサの手配をしたと語っている。また、通夜の際、遺体の上に置かれる蝋燭立てや部屋に置かれる花は教会が手配するのが一般的であるが、神父の場合はフリン神父の友人であるオローク神父が持ってきてくれた。主人公の少年はこの花を「濃厚な匂いのする花」(There was a heavy odour in the room – the flowers)と表現しているが、葬儀の際に使用する大ぶりで、濃い匂いをさせる花とはおそらく百合の花ではなかったろうか。したがって、オローク神父はフリン神父のために花屋に頼み神父の小さな部屋に相応しい小ぶりの花束を作らせたのではなく、教会が使用していた花を持参したものと考えられる。

このように教会組織はフリン神父の死去に当たって無関心あるいは無視を決めていたようである。オローク神父のフリン神父への忠節度も疑わしい。もし彼の忠誠が衷心から発していたのであれば、オローク神父は教会組織に働きかけフリン神父への応分の葬儀の手配を整えたはずである。教会とフ

<sup>59</sup> アイランド神学校、1628年設立。

<sup>60</sup> Pontificio Collegio Irlandese, Roma, Italy. (2012年3月4日)

<sup>61</sup> St. Catherine's Parish 教会案内、2011年入手、8ページ。

<sup>62</sup> 同書、9ページ。

リン神父との関係は姉妹が途方に暮れるほど殺伐としたものであったようである。

「姉妹」の初版においてもリン神父と教会との劣悪な関係が示唆されている。以下は主人公の少年と叔父さん、伯母さん、そしてコッター爺さんが神父の葬儀について語り合うシーンである<sup>63</sup>。

Is he better, uncle John?

He's dead..

Do you think they will bring him to the chapel? asked my aunt.

Oh, no, ma'am. I wouldn't say so. (Mr. Cotter)

Very unlikely, my uncle agreed.

ここで少年は叔父さんに神父の様態を尋ねている。それに対し叔父さんは「亡くなったよ」と答える。少年の叔母さんは「[教会は] 神父のご遺体を礼拝堂に移されるのでしょうか」と尋ねるが、コッター爺さんはそれを否定し、叔父さんも「その可能性はかなり低いだろう」と答えている。こうした会話からも教会とリン神父の間には極めて深刻な確執が存在していたことが窺われる。

では神父が教会からこのような排他的な扱いを受けていた理由は何か。その最大の理由にはリン神父の出自、また、当時ダブリンに横行したであろう支配階級、すなわちエリート階級と非エリート階級との断絶、そして、そこにまつわる社会の閉鎖性があったのではないだろうか。

ジョイスは『ユリシーズ』でジョイス自身とされる主人公スティーヴンに次のように語らせている。

自分は二人の主人に仕える召使さ……一人は大英帝国、もう一人は、  
聖なるローマ・カトリック使徒教会さ。

I am a servant of two masters...The imperial British state, and  
the holy Roman catholic and apostolic church.<sup>64</sup>

ジョイスは当時のアイルランドにおいて社会を支配する勢力として大英帝国とカトリック教会の二つを挙げた。そうした背景に照らしリン神父のケースを考察すると、アイリッシュタウンという極貧層の住む街を故郷とし自らの優秀性だけを頼りに支配階級に上り詰めていったリン神父の姿は、周囲のエリート司祭達から見れば単なる「成り上がり者」でしかなく、自分たちとは相容れない存在でしかなかったのではないだろうか。そうしたリン神父の出自が教会組織において広く認知されていたとしたら、それが彼の昇進に有利に働いたとは考えにくい。却って、それが彼を組織から排斥さ

<sup>63</sup> Jackson, John W. & McGinley, Bernard, *James Joyce's Dubliners - An Annotated Edition*, Sinclair-Stevenson, 1993, p. 10.

<sup>64</sup> Joyce, James, *Ulysses*, Vintage Books, 1986, p. 17.

せる傾向を強めていったと見る方が自然ではないだろうか。将来、教会組織の幹部となり、極貧に苦しむ人々に寄り添い神の声の仲介者としての司祭職を全うしようと神父は、固い決意で燃えていた。しかし、彼は下町の雑踏の一角にある聖キャサリン教会に、39年の長きに渡り務める間に、奇人・変人という噂を醸成してしまう。そうした噂も教会が彼を忌避していく理由となっていたのではないだろうか。

その様な状況にあっても神父は物事を頑ななまでに几帳面にはかどらせようとした<sup>65</sup>。司祭の生活は朝が早い。教会の案内書によると朝のミサは月曜日から金曜日まで朝8時から、夕刻のミサは7時半からの開始となっている。ミサが始まるまでの時間の過ごし方であるが、まず祭服に着替えミサを捧げるにあたって自らの心構えを整えるための祈りを捧げる。そして礼拝堂に入り聖具などの確認を行う。これらをすべて行なうと少なくとも1時間は要する。したがって、8時のミサに間に合わせるためには神父は遅くとも朝7時までには教会に到着していなければならない。彼の住まいはグレート・ブリテン・ストリートにある。そこから聖キャサリン教会までは4 km程の距離があるが、途中、ダブリンを南北に分けるリフィー川を渡る必要がある。徒歩ではおそらく1時間くらいはかかるだろう。したがって、フリン神父は朝6時には起床する必要があるだろう。ダブリンは快晴の日は少なく、曇りの日、風の強い日、雨の日が多い。そんな不安定な天候<sup>66</sup>の中、毎日、とぼとぼと教会までの道のりを歩く神父はその道すがらローマの日々を懐かしく思い、自らが思い描いていた道と現在の我が身の置かれた状況との途轍もない乖離に苦悩し、強い寂寥感や孤独感にさいなまれていたのではないだろうか。

教会に到着すると彼は丁寧に信者たちに対応した。ミサや告白にはギネスのビール工場やウイスキーのジェムソンの工場、ビスケットのジェイコブスの工場で働く人々、また、家畜市場や野菜市場で働く人々、さらに職のない人々もやって来た。彼はそうした人々にキリストの教えを説き、大罪・小罪は何かを考え聖餐式の準備をしと多忙な毎日を送った。

しかし、姉のエライザは総じて、司祭の務めは彼には荷が重すぎた。それで一生を台無しにしてしまった<sup>67</sup>、と語る。しかし、それは神父の心奥を映したものではなかった。「姉妹」の初版でジョイスは“His life was so methodical and uneventful.”<sup>68</sup>と記している。ローマの神学校で将来のカトリック教会を担う者としてのエリート教育を受けた彼にはそうした生活が極めて規則的 (methodical) で単調 (uneventful) であったのだろう。少年の叔母は「彼は失意の人だった」<sup>69</sup> (a disappointed man)<sup>70</sup>と語っている。彼女の推量は的を得たものであったと思われる。ちなみに、この叔母は実在する。ジョ

<sup>65</sup> Joyce, James, *Dubliners*, Wordsworth Classics, 1993, p. 6: (He was too scrupulous always.)

<sup>66</sup> 在日アイルランド大使館 <http://www.embassy-avenue.jp/Ireland/Ireland/index.html>. (2010年3月6日)

<sup>67</sup> ジェイムズ・ジョイス『ダブリンの市民』結城英雄訳、岩波文庫、2008年、25ページ。

<sup>68</sup> Jackson, John W. & McGinley Bernard, *James Joyce's Dubliners*, Sinclair-Stevenson, 1993, p. 10.

<sup>69</sup> 前掲書、25ページ。

<sup>70</sup> Joyce, James, *Dubliners*, Wordsworth Classics, 1993, p. 6.

イスの母親の妹で義理の叔母に当たる Mary Murray が韜晦したとされているが、ジョイスはこの叔母に絶大な信頼を寄せていた。したがって、主人公の叔母の語ったこともまた信頼に足りる話であったと推測する。

しかし、もしエライザが語る通り神父が精神を病んでいったとするならば、それは聖杯破損事件とは全く無縁のことであって、彼が昇ろうとしたエリートへの階段が外された時から、すなわち、彼が教会から排除されていった頃から徐々にそうした兆候が表れ始めたと考える方がより合理的ではないだろうか。そして、聖職者の原点に戻り、大罪・小罪について考え始め窮乏に喘ぐ人たちの悩みや苦しみを、毎日、定期的に聴聞し始めた頃からそうした鬱積した感情が次第に心の中に蓄積されていったのではないだろうか。

ここで、神父の「告解室で一人、薄笑いをする」という語りについて考察したい。原文では、There he was, sitting up by himself in the dark in his confession-box wide-awake and laughing-like softly to himself<sup>71</sup>となっている。すなわち、神父は暗闇の中、背を正して彼の告白室の中ではっきりと (wide-awake) 目を見開いて自らに対して薄笑いをしていた、とジョイスは記しているのである。筆者はこの「彼の告解室」(his confession-box) という所有格が特にジョイスが強調したい部分であったのではないかと考える。なぜなら、告解室はとりもなおさず神父の日常の「執務室」であったのであり、そこで、彼は背を正してはっきりと目を見開いて自らに対して薄笑いをしていた。言い換えれば、奇人・変人と噂をされていた神父は、この「薄笑いをする」という行為の中では明確な意識を保持していた、とジョイスは記しているのである。その執務室で彼は39年もの長きに渡り、人々の告白を聞き、善悪を評し、罰を課し、赦しを与え、悔悛を求めてきた。主人公の少年は告白について「司祭だからといって、どうしてそんなことをする勇気が持てるのだろうか」と疑問を呈しているが、教会から排斥をされていた神父もこの少年と同様、長年、自らが行ってきた「告解」という行為について懐疑的な感情を抱いていたのではないかと。そして、自らの「執務室」すなわち「告解室」で、過ぎ去った39年を顧み、「私が行ってきた告解とは、一体、何であったのだろうか」、「自分の39年間は、一体、何であったのだろうか」と自らの行為に対し薄笑いをしていたのではないだろうか。それはとりもなおさず、教会批判を展開するジョイス自身の「告解」に対する嘲笑ではなかったろうか。

---

<sup>71</sup> *Ibid.*, p. 7.

## 結論

以上、「なぜジョイスは聖キャサリン教会を「姉妹」の舞台として設定したのか。ジョイスの思惑とは何であったのか」をテーマに考察を行った。その結果、ジョイスには次の思惑があったと結論付ける。

① 聖キャサリン教会は毎日の糧を求め、汗して働く労働者や商店で働く人々、物乞いなど様々な人々の住むダブリンの下町の喧噪の中にあった。そうした街にあって豪華なステンド・グラスで飾られた聖キャサリン教会の姿はジョイスが『ダブリンの市民』のテーマとした「麻痺」(Paralysis)、「ノーマン」(Gnomon)、「聖職売買」(Simony)を象徴するものであった<sup>72</sup>。これらの『ダブリンの市民』に課したテーマと聖キャサリン教会の姿がジョイスの教会批判のテーマと一致した。

② 聖キャサリン教会はその構造から「告解」重視の姿勢が顕著であった。ジョイスの教会批判の基幹を成すものは「告解」への疑義である。このため、告解重視の姿勢が鮮明である聖キャサリン教会が逆にジョイスの「告解」に対する疑義を具現化させ、ジョイスはこの物語の設定場所として聖キャサリン教会が最適であると確信した。

③ 聖キャサリン教会は「生き物の魂を抹殺する」ブッチャー・ストリートに在った。ジョイスにとって聖キャサリン教会はダブリンの人々の魂の束縛の象徴そのものであり、その告発をするには聖キャサリン教会が格好の舞台であった。

④ 『ダブリンの市民』の出版が容易に実現しないジョイスは出版社に対し「きれいに磨いた私の鏡でアイルランドの人々が自分達の姿を見るのを、もし、あなたが妨げるとするのならあなたはアイルランドの文明の流れを遅らせることになる」と私は確信します<sup>73</sup>と語っている。「告解」を想起させる聖キャサリン教会の姿から、ジョイスは市民に宗教や信仰のあるべき姿の再考を促す目的でこの教会を選択した。

ジョイスはこの作品で単に人々に「告解」を迫る教会の存在を告発しただけではなく「告解」を聴聞する司祭自らが「告解」に疑念を示すという極めて複雑ではあるが示唆に富んだ見事なストーリーを創り上げた。この作品のすばらしさはそれだけに留まらない。ジョイスは「姉妹」の物語を介し、彼の生きた時代のカトリック教会組織のありようを記録するという歴史的史料としての価値を付した。結果として、彼は当時ダブリンに生きた人たちだけでなく、今を生きる私たちに対しても真の宗教とは何か、信仰とは何かといった普遍的な命題を提示した。

最後に、ジョイスのカトリック信仰について筆者の研究の展望という視点から補足しておきたい。このテーマについて本稿では紙幅の関係から言及することは出来なかったが、筆者はジョイスが批判

<sup>72</sup> 金田法子『『ダブリンの市民』の中の作品「姉妹」に見るジェイムズ・ジョイスの教会批判』『社会文化科学研究科紀要』第32号、岡山大学大学院、2011年11月、267-284ページ。

<sup>73</sup> ジェイムズ・ジョイス『ジェイムズ・ジョイス伝 1』宮田恭子訳、みすず書房、1996年、255ページ。

の対象としたのは、彼が生きた時代のカトリック教会組織であり彼の信仰とは別であったと推察する。その根拠の一つは、弟の「いつも朝が遅い兄がパリでの独身時代にもトリエステで結婚していた時にも、どこにしようとも、どの様な気象条件にあっても、必ず復活祭前の聖木曜日と聖金曜日には朝5時に起きて早朝ミサに行っていた」<sup>74</sup>、「兄には信仰の危機はなかった」<sup>75</sup> という記述である。

ジョイスは『若い藝術家の肖像』の中で、アイルランドは「司祭に乗っ取られ神から見放された民族」(A priestridden Godforsaken race)<sup>76</sup> という父親の語りを引用している。裏を返せば教会の支配がなかったならば、アイルランドの人々は神の恩恵を受けることができていたはず、とジョイスは語っているのではないか。

真の宗教とは、そして、信仰とは何か。ジョイスは常にその答えを捜し求めていたと筆者は考える。

以上

---

<sup>74</sup> スタニスロース・ジョイス 『兄の番人-若き日のジェイムズ・ジョイス』 宮田恭子訳、みすず書房、1993年、132ページ。

<sup>75</sup> 同書、159ページ。

<sup>76</sup> Joyce, James, *A Portrait of the Artist as a Young Man*, Wordsworth Classics, 1992, p. 27.

## 参考文献

### Bibliography

- Rice, Thomas Jackson, *James Joyce – A Guide to Research*, Garland Publishing Inc., 1982.
- Slocum, John J. *A Bibliography of James Joyce*, Greenwood Press, 1977.
- Staley, Thomas F., *An Annotated Critical Bibliography of James Joyce*, Harester Wheatsheaf, 1989.

## 引用文献

### ジョイスのテキスト、史料等

- Joyce, James, *A Portrait of the Artist as a Young Man*, Wordsworth Classics, 1992.
- \_\_\_\_\_, *Dubliners*, Wordsworth Classics, 1993.
- \_\_\_\_\_, *Stephen Hero – Part of the first draft of ‘A Portrait of the Artist as a Young Man’*, ed., Spencer, Theodore, *Jonathan Cape, 1975*.
- \_\_\_\_\_, *Ulysses*, Vintage Books, 1986.
- \_\_\_\_\_, *Selected Letters of James Joyce*, ed., Ellmann, Richard, Faber and Faber, 1992.
- Joyce, Stanislaus, *My Brother’s Keeper – James Joyce’s Early Years*, ed., Ellmann, Richard, Da Capo Press, 1958.
- ジェイムズ・ジョイス『若い芸術家の肖像』丸谷オ一訳、集英社、2009年。
- ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』丸谷オ一訳、集英社、1996年。
- ジェイムズ・ジョイス『ジェイムズ・ジョイス伝 I』宮田恭子訳、みすず書房、1996年。
- ジェイムズ・ジョイス『ダブリンの市民』結城英雄訳、岩波文庫、2008年。
- スタニスロース・ジョイス『兄の番人-若き日のジェイムズ・ジョイス』宮田恭子訳、みすず書房、1993年。

## 研究書

- Crawford, John, *St. Catherine’s Parish Dublin 1840-1900 – Portrait of a Church of Ireland Community*, Irish Academic Press, 1996.
- Jackson, John W. and McGinley, Bernard, *James Joyce’s Dubliners – An Annotated Edition*, Sinclair-Stevenson, 1993.
- Jackson John W. and Costello, Peter, *John Stanislaus Joyce – The Voluminous Life and Genius of James Joyce’s Father*, St. Martin’s Press, 1997.
- Ellmann, Richard, *James Joyce*, Oxford University Press, 1983.
- Ellmann, Richard, *Four Dubliners*, George Braziller, 1988.

Fargnoli, A.N. and Gillespie, M.P., *James Joyce A To Z*, Facts On File, 1995.

Nisi, V., Davenport, G., and Haahr, M., *Mediated portrait of the Dublin Liberties*, Trinity College, Dublin.

Rice, Thomas Jackson, *James Joyce - A Guide to Research*, Garland Publishing, 1982.

St. Catherine's Parish 教会案内。

Stanley, Thomas F., *An Annotated Critical Bibliography of James Joyce*, Harvester Wheatsheaf, 1989.

Sullivan, Kevin, *Joyce among the Jesuits*, Greenwood Press Publishers, 1958.

A.N.ファークノリ & M.P.ギレスピー 『ジェイムズ・ジョイス事典』 ジェイムズ・ジョイス研究会訳、1997年。

J.C.ベケット 『アイルランド史』 藤森一明他訳、八潮出版社、1978年。

アイルランド自由国統計（現Central Statistics Office）。

石川謙次郎 『変わるイギリス・変わらないイギリス』 日本放送出版協会、1993年。

金田法子 『『ダブリンの市民』 中の作品「姉妹」に見るジェイムズ・ジョイスの教会批判』 『社会文化科学研究科紀要』 第32号、岡山大学大学院、2011年11月、267-284ページ。

京都大学文学部西洋史研究室編 『西洋史辞典』 東京創元社、1976年。

国際通貨基金統計（IMF Outlook - World Economic Outlook 2011年9月版）。

日本キリスト教出版局 『キリスト教人名辞典』 1968年。

上智学院新カトリック事典編纂委員会 『新カトリック大事典』 研究社、2002年。

世界文学大事典編集委員会 『世界文学大事典2』 綜合社、1997年。